

2009 年度

10 チームの入賞争い 見事7位入賞

全日本実業団駅伝 (群馬県: 100km)

4時間56分29秒 (7位)



し烈な入賞争い, 10チームで大混戦 抜け出したのが大塚製薬と旭化成

6区の中盤から9チームで7位集団を形成していたが、向かい風を嫌って誰も前に行きながら、縦一列に並ぶ珍しい光景。最終7区に入ってもペースは上がりず、集団が崩れない。後ろから1チーム、日立電線が追い上げてきて、10人でゴールまで緊迫したレースを展開した。

良ければ7位、悪ければ16位。タイム的には僅差にせよ、その順位幅は大きい。5kmが16分半という女子並みのペースでゴールを目指す選手たちの心境はいかばかりか。残されたあと2つの入賞枠を確保するには、最後のスプリント勝負にかけるしかない。

昨年、1位と1秒差で3位になった旭化成は「そういう時のために」と、今回はスピードの切り替えができる幸田高明をアンカーに起用。大

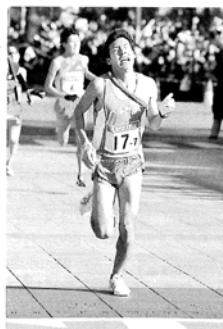
▼スプリント勝負に力を尽くしたアンカーたち



塚製薬は3000m障害でアジア選手権と東アジア大会に出た松浦貴之を配した。ゴールを目前にして、先に動いたのが幸田。集団の中から179cmの長身が前に出る。しかし、昨年の足立知弥と同様、わずかにスパートのタイミングが早かったか。ついこの前までトラックレースに出ていた松浦がスルッと出てきて幸田をかわし、先着。大塚製薬が3年ぶり入賞の7位に入った。

河野区部長兼監督から現場の指揮をまかされた大伏孝行ヘッドコーチは「入賞を目標にしていたので、まずまず」とホッとした様子。長丁場を走る井川重史が9月に足の甲を疲労骨折し、1ヵ月走れなかったのは痛手だったが、松浦や松岡佑起ら若手のがんばりもあって、目標を達成した。

大塚製薬と同タイムの4時間56分29秒で8位になったのが、旭化成。課題の「勝負弱さ」をまたも露呈するかたちになってしまったが、宗猛監督は「8番プラスマイナス2を予想していたので、順位的にはこんなもの」とサバサバ。しかし、本音を言えば優勝争いに絡みかけた。昨年1区で区間賞を取った大野龍二が本調子では



▲大熱戦の7位争いを制した大塚製薬のアンカー・松浦貴之



▲入賞の最後のイースをもぎ取った旭化成のアンカー・幸田高明

なく、トップから27秒遅れての21位スタート。「1区で27秒差負けは、5〜6区の1分負けと等しい」と宗監督。4区の佐藤智之で流れを変えたかったが、区間18位にとどまって「完全に終わりました」(宗監督)。

昨年は3区で岩井勇輝が区間賞を取って、2区のインターナショナル区間で途切れた流れを元に戻した。今回の敗因は「その岩井が使えなかったこと」と、宗監督は見る。

以下、トヨタ紡織、九電工、カネボウ、J R東日本、小森コーポレーションと続き、ここまで大塚製薬からわずか3秒差。さらに2秒遅れてJ A L グランドサービス、NTNが入った。